

日本舞踊の基礎的技法 について

○志賀山 葵
石黒 節子

古くから日本舞踊の稽古は師匠の踊りから盗むことにより、その技法の伝授が行われてきた。本研究では古い歴史をもち、修得に最低10年を必要とする志賀山流の踊りを科学的に検討し、修業年数に伴って獲得されていく技法を明らかにし今後の指導に役立てることを目的とした。研究法としては、志賀山流の特色である ナンバ の技法の多い「潮来」、「越後獅子」をとりあげ、16ミリフィルムに収録し、Nac Sportiasにより分析した。経験者は、志賀山流稽古年数1年、3年、7年、13年、及び葵である。

基礎的技法

- (1) 牛ほどきものを練習することにより基本的な身体をつくること。この牛ほどきもの内容は主として、手・足などの部分的技法を上達させる。
- (2) 志賀山流では、この部分的な技法より身体を中心をとらえ、弧を描くように踊る流れの意識

をもたせることに主眼がある。

本研究では以上のうち(2)の立場を明らかにするために体軸と踊りの美的表現に必要な胸の三角形を設定し、考察をすすめた。

結果と考察

〈体軸と胸の動き〉図1、図2は「よんやさー」における体軸と胸の動きである。(体軸とは胸の中心と、腹の中心を結ぶ線であり、胸の三角形とは右肩、左肩、胸の中心を結ぶ三角形である)。葵のものは、修業1年のものと比較し、体軸が垂直のまま移動し、ナンバのきまりである最終地点に横ぶれせず下向(腰を入れる)している。又、それに支えられる胸の三角形の動きが水平に安定している。

〈動きの間と肘の使い方〉図3、図4は、手首、肘、胴体、足のはこびの速度変化を比べたものである。葵の上肢(手・肘)の動きの変化が、修業1年目の弟子に比べ、体幹部より著しく激しいのがわかる。更に、図5、図6から、この間のめりはりが、肘のひきつけとのぼし方に重要なポイントがあることが明らかになった。志賀山流の特色である。内より外にむかう動作が、内にひきつける。引きもどす動作の力関係から成るという点を実証できたといえる。

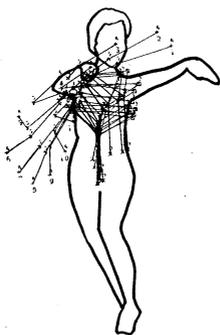


図1. 体軸・胸・手のはこび(葵)

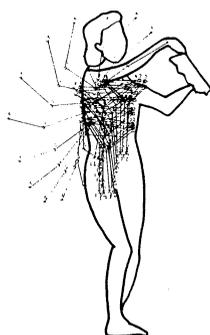


図2. 体軸・胸・手のはこび(修業1年目)

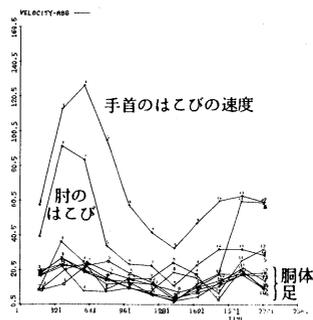


図3. 手首・肘・胴体・足の移りの間(葵)

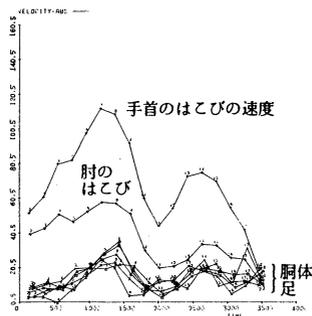


図4. 手首・肘・胴体・足の移りの間(修業1年目)

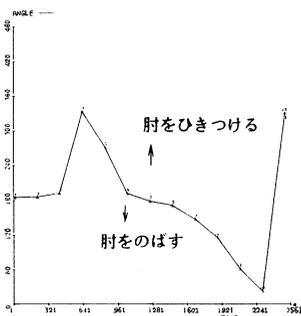


図5. 肘の角度の変化(葵)

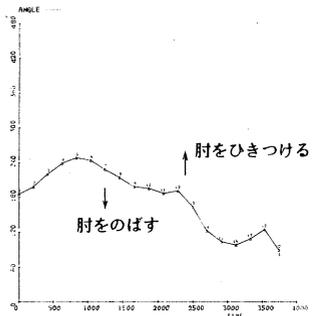


図6. 肘の角度の変化(修業1年目)